

臨床福祉専門学校
言語聴覚療法学科 平成27年度 第一回教育課程編成委員会 議事録

日時：平成27年10月26日（月）13：00～14：30

場所：臨床福祉専門学校 202 教室

出席委員及び所属

田村 満子（NPO法人 こども発達療育研究所理事長）

園田 尚美（株式会社 言語生活サポートセンター 代表取締役）

内藤 明（言語聴覚療法学科 学科長）

黒川 容輔（言語聴覚療法学科 専任教員）

萬崎 保志（事務部長）

樋口 豊朗（事務局 教務課）

1. 学科長挨拶（教育課程編成委員会開催の趣旨説明）

配付資料を基に本委員会の趣旨説明

既に職業実践専門課程の認可を得ている学校のアンケートから「学生の実習・演習に関する満足度向上 / 教員側の専門的な知識・技術・技能向上」という成果が出ている。

本校でも現場で勤務されている委員の意見を踏まえて、2年課程でどこまでできるか、どのような専門家を育てていくのかを検討し、さらなる教育プログラムの発展を目指す。

2. 委員からの言語聴覚士に対する視点（意見交換）

園田：

- ・失語症患者に対して、病院での訓練だけでなく、幅広い年齢層に対応できるような訓練を取り入れるべき。
- ・患者の人生を背負う使命を自覚し、プロフェッショナルとしての認識を持つ必要がある
- ・手話だけでなく、失語症に特化した要約・筆記の中身も取り入れるべき

田村：

- ・発達支援事業においては心理職に携わるS Tが多いが、運動機能訓練・言語訓練の専門的要素が備わっている人材が必要
- ・増加傾向にある発達障害の患者に対して、現場で指導ができるコミュニケーション力の必要性

内藤（委員の意見を踏まえて）：

- ・自身の家族を含めた幅広い年代に対応できる専門的能力の向上
- ・S Tが現代社会のどのような位置の職として求められているか、自分自身を見つめ直すことができる人材の育成が必要とされている。

3. 個別訓練という視点 / 求める人物像（意見交換）

園田：高齢者に対して、人権にも関わる事なので、専門的なコミュニケーション能力が必要とされる。ただ話すだけではない。仕事の重さを理解するべき

内藤：実際に現場でどのような対応をしているのか、段階的に現場実習を観るのも学生の理解のうえで必要、本校のカリキュラムにそういった機会が導入できれば理想。

黒川：個別訓練だけの視点でなく、教育方法として学生の意識を変えさせるには評価項目・求める人物像の明確化をし、到達点を定める必要がある。

園田：現在求めるニーズとしては、病院以外の特に福祉分野が多い

田村：多分野を尊重し理解をする必要がある。患者に対する施設側の思いも理解できる幅広い研修が求められる。

園田：質の高い教育として、患者だけでなく家族の心理状態も理解できると良い

内藤：自身に関わる専門職の価値観・存在意義を追及する質の高い教育が必要

4. 現場実習について

田村：患者の家族の多くは専門家と触れ合う機会を望んでいる。そういう意味で養成施設と連携がとれれば良い

園田：個別指導が多いS Tの職種にとって、情報交換の場を設ける必要がある。

黒川：カリキュラムに定められている臨床実習で、初めて患者に接する学生も多い早い時期に外部実習として患者に触れ合える機会を設けられたら良い。

田村：自閉症の患者は現場で見る事が一番理解できる。

内藤：教育の導入部分の明確化が必要

(まとめ)

今回委員から出た意見を参考に、現在教育として求められるものは

- ・患者とその家族に対するコミュニケーション能力の向上
- ・その元となる専門的能力の向上
- ・STとして求められる人物像の明確化・評価項目の明確化・仕事の理解

が挙げられる、これらを教育の一環として活かすには、早い時期に現場実習の機会を設けて、実際の患者を見る必要がある。本校の学科会議で検討し、次回教育課程編成委員会でさらなる掘り下げを行う。